

『切なさ (01/05)』

子供は切なさを  
身につけて大人になっていく  
人を愛することも  
自分の性格も  
せつなさを身につけて  
大人になっていく

せつなさが消えたとき  
人は鬼になる  
生命の炎が火炎地獄になる  
せつなさが芽生えたとき  
一条の光が射し込むように  
火炎地獄が生命の炎となる

幼児はせつなさを  
知ることによって大人になる  
人を慈しみ  
自分を慈しみ  
切なさを知ることによって  
子供は大人になっていく

『悲しみ (01/05)』

悲しみは胸を締め付けます  
心が痛いほど辛くします

悲しみを知ることによって  
他人の痛みを知ようになるのですね  
悲しみを心に宿すことによって  
人は人生の豊かさに導かれるのですね

生きる様々な人々の音色の響きが  
心に痛いほど通じてくるのですね

『説く事 (01/05)』

人は平等だという  
人は自由だという  
人は誰もが  
その権利を持っていると説く

人が平等である社会を  
人が自由である社会を

人は誰もが  
その社会を持っていないじゃないか

『祭り日 (01/05)』

孤独な男は  
祭りの日々が怖いのです  
天涯孤独のみで  
愛を捨ててしまった  
人生を語る供もいなく  
供に食事をする人もいない  
いつも一人だから  
孤独な男は  
祭りの日々が怖いのです

『投票権 (01/11)』

人は誰もが投票券を持っている  
明治以後の多くの人がね  
それこそ社会システムと戦って  
得たものなんですがね

多くの人がそのために  
命を落したり  
理不尽な圧力で一生を終えました  
日本に民衆参加の政治を夢見て

『若者へ (01/11)』

文明の光を民衆に  
文化の恩恵を一部の人々ではなく  
万民の上に投射するように  
明治大正昭和の政治と戦って

平成になって  
水のように投票権は  
有るものだと  
風のようにすべてが  
運ばれてくるものだと  
若者は投票にも行かず  
携帯電話で自分が  
社会の一員であることを  
若者は確認する

空気が永劫普遍に存在すものか  
水が大海原が永劫であるかどうか  
風がなぜ大気の流れとなっているか  
人が何故、より強いものの下で  
奴隷としての生活をしないのか  
能力ある者も劣る者も  
富める者も貧しき者も  
人は等しく同列であることを  
標榜とした社会構築を  
いま、若者から崩れ去ろうとしている  
投票権も時の権力によって  
消えていきますよきつとね

『鏡の像 (01/11)』

日本の醜い現実が  
若者たちによつて築かれようとしている  
悪を悪として処理できない社会を見て  
若者は立ち上がるとせず  
醜い社会に同化して事なかれ主義で  
人生を標榜していこうとしている

End all 2001/01

『ホーイーホーイー (02/01)』

悲しい声でホーイーホーイー  
涙の音色でホーイーホーイー  
夕暮れ町の黄昏に  
鎮守の森で響く音は  
何が淋しくて鳴くのやら  
ホーイーホーイーホーイー

夜明けの町に響わたる  
ホーイーホーイーホーイー  
霞の鎮守の森からね  
涙か露に濡れたのか  
ホーイーホーイーホーイー  
朝日と呼んでる音色かな

ホーイーホーイーホーイー  
人の世苦しさあるけれど  
たった一つの幸せを  
恋し祈った願掛けの  
希望の光を呼んでる  
ホーイーホーイーホーイー

『雪』 (02/07)』

雪の降る日は  
難儀です  
文化も文明も

南の国には  
雪が無いという

北の国には  
寒さが有るんです  
雪を降らせる

『暗幕の舞台 (02/12)』

村の100人が集まった  
暗幕の中で  
道化師は語り始めた  
Breathe in deeply  
And breathe out slowly  
道化師も100人も  
タンバリンの音が震え  
100人は道化師になり

道化師の心は

100人の心になって  
響き戻っていった  
100人が100人の心を  
共有し供に悲しみ  
供に喜びも共感し  
道化師の語りは  
Breathe in deeply  
And breathe out slowly.

『Where……? (02/13)』

ここは(どこ)……?  
私の目指す  
その場所ではない

ここは(どこ)……?  
愛する人もいなければ  
愛される事もない

ここは(どこ)……?  
寂しさが漂い

悲しみが蔓延している

描く気力をも失い

尽きせぬ苦しみを聞いてくれる

ここはどこ……？

いつになったら

私は辿り着くのだろう

ここはどこ……………？  
ここはどこ……………？  
ここはどこ……………？

End all 2001/02

私の笑いは何処に行ったの  
うつろな日々の中で  
見失って消えてしまった

私の愛は何処に消えたの  
人々の冷たい視線の中で  
恐れおののき消えてしまった

寂しさの海の中で  
人々は語りを無くし  
愛する事も無くし

春の海は真珠のように  
キラキラと輝いていますか  
病棟から見える瀬戸の海原は  
春を呼んでいますか

海原は 人生の涙も  
悲しみも 透明にしてくれるますね  
黄金色に染まった海面  
月夜を映している海原  
荒れ狂う海の怒り

悲しみの海原の中で  
人々は明日への希望も

海原は天井の星々と同じです  
ね 人の優しさを人の小ささを  
温かく抱擁してくれる

『桜 (03/28)』

さくらさくら  
一斤染の花びらは  
夜のライトに浮かび魅せ  
風の流れに揺れうごく  
人の流れに旅路の思い  
一斤染の花びらは  
人の流れの旅路の里か  
さくらさくら  
旅路の花よ

人の思いで集め咲き  
風の流れに舞い散るは  
旅路の涙を拭き取るように  
桜の花よ花びらよ  
心の涙を優しく包み  
さくらさくら  
旅路の花よ

End all 2001/03

さくらさくら  
石竹色の花びらは  
古樹の証しの花びらか  
風になびいて揺れうごく  
人の旅路の思いでか  
石竹色の花びらは  
人の門出の思いでか  
さくらさくら  
旅路の花よ

さくらさくら  
桜の花よ花びらよ



『春 (04/06)』

一人ぼっちにも春は来る  
泣きたい心にも春は来る

ほかほかと暖かい陽射しが  
人生まで明るくしてくれる  
ほかほかと明るい陽射しが  
心にゆとりを作ってくれる

一人ぼっちにだって春は来る  
凍てつく心にだって春は来る

柔らかく優しい陽射しが  
明るい希望を灯してくれる  
ほかほかと暖かい陽射しが  
生きる勇気を燃やしてくれる

『桜 (04/08)』

満開に咲いた花びらは  
一風ごとにひらひらひらと

飛んでいくいくつもいくつもの  
花びらが風に飛んでいく

風に舞う花びらのカーテン  
ひらひらひらと  
ながされゆられながら  
大地へと落下していく

花びらの絨毯小道を  
人は歩いていく  
人々は歩いていく  
家族連れも友達同士も恋人二人も

『花嫁姿 (04/11)』

樹々の間から  
木漏れ陽が揺らぎ  
緋もうせんの上に  
花嫁姿を  
お母さんは夢見ています

緋もうせんの上の  
あなたの花嫁姿が

木漏れ陽の揺れ射すなかで  
どんなに美しいかを  
きつとお母さんは知っている  
お父さんが涙を流すことも  
お母さんは知っているのです  
いつかきつと来る日を  
お母さんはどうに見ているのです  
緋もうせんの上で  
両手をついているあなたの花嫁姿を  
春の木漏れ日の眩い中で  
お母さんは見ているのですよ

樹々の間から  
木漏れ陽が揺らぎ  
緋もうせんの上で  
あなたの花嫁姿が  
眩い美しさを見ているのです

『夢 (04/11)』

ひらひら舞い落ち夢  
一片一片風に舞いながら

ひらひらと夢が風に揺れ  
大地へとまた落ちていく  
人々の想いの夢が  
人々の心の思いが  
ひらひらと風に揺れ  
ひらひらと風に流れ  
一片一片大地へと着地する  
一片一片風に舞いながら  
ひらひら風に舞い落ちる

『誕生日 (04/13)』

季節はめぐりめぐり  
ふたたびその日が来る  
過ぎ去った時間も  
未来の時間にも  
季節がめぐりめぐり  
その日はやって来る

人は誰も持っている  
その日をその日を  
家族がいても  
多くの人がいっても  
己のその日を

人は誰もが持っている

季節はめぐりめぐり  
ふたたびその日が訪れる  
誰にも公平に  
己のその日が  
必ず確実な足取りで  
その日がやって来る

『ラッタッタ (04/22)』

ラッタッタラッタッタ  
神様って純粹な心だけなのかな  
人はだって  
純粹な心ばかりではないから  
いろんな心が混ざっているから  
人は神様より複雑なんだ

ラッタッタラッタッタ  
昨日生まれた子もいれば  
今日みまかった人もいる  
神様は死なないから  
人の心など悲しみなどはね

きっと知らないのかも

ラッタッタラッタッタ  
でもね神様に祈るんですよ  
人にはどうにもならない力を  
神様は持っているから  
行ける者も残るものも  
みな一様に幸である事をね

『鈴 (04/26)』

世の中に鈴が無かったら  
きっと音楽も無かったろう  
鈴の音色に人は古代から  
耳を傾け心を傾け  
希望と勇気を持って来た

昔からも今からも未来へも  
鈴の音色が響いている  
一本道のように  
鳴り響き渡っている  
貴方の心にも生命の雫にも



世の中に鈴が無かったら  
人はこの様ではなかったろう  
人を愛し人をいくしみ  
生命の心を昔に  
今に未来へもてなかったろう

生命は何故に生まれる  
生命は何故に死んでいく  
死ぬ事をわかりながら  
生命は何故に誕生する  
未来で待っているのは  
死と生きの忘却なのに

『生命 (04/26)』

人は何故に生まれる  
人は何故に死んでいく  
死ぬ事をわかりながら  
何故に生命は生まれる  
新しく生まれそして  
生命は死んでいく

己しかわかることが  
出来ない生きの思いも  
等しく忘却の彼方に消える  
なのに生命は何故生きる  
生きの喜びも辛さも  
生きの悲しみも切なさも  
生きの苦しさも悩みも  
死に消え忘却の彼方



『野道 (09/02)』

月に照された野道へ  
道化師が現われて  
たった一人歩いている  
深閑の野道を  
戯けながら未来へと  
旅人は独り歩いている  
星々の煌きを仰ぎ  
星々の響きに耳を傾けて

淋しさを舞って  
悲しみを舞って

月の明かりに  
戯けの舞は照されて  
深夜の闇を背景に  
道化師は未来へと  
夢を追い続けて舞っている  
月夜の野道を  
煌めいている星を観客に  
旅人は舞戯け  
明日へと歩いている

『杜中 (09/02)』

杜中の庭が  
小雨の闇に  
ひっそりと  
照らされている  
根もとの芝に  
凡てが染み込まされ  
静かに佇んでいる

まるで哀しみを  
諦めたように

まるで涙を  
諦めたように

濃く湿った杜中の枝は  
闇に己の濡れを隠し  
照らされた灯の中で  
大気の滋養を吸っている  
まるで人と生れなかった

悲しみを忘れるように

まるで人と生れなかった  
悲しみを忘れるように

杜中の庭は  
闇の滋養を吸い込んで  
小雨の闇に佇んでいる  
薄く照らされて  
誰も通らぬ外灯に  
ひっそりと  
静かに照らされている

『森の中 (09/02)』

深い森の中に  
一軒の家が有ります

鬱蒼とした木々の中に  
赤いトタンの屋根が見えます

目を上の方へやると  
枝葉が風に揺れています

上空の青空と陽が  
キラキラ斑いています

男は森の空き地で  
トントンと薪を割って

女は家の前で  
一心に剪定しています

鳥のさえざりとリスが通り  
風がひんやりとすぎて行く

男はトントンと斧をふり  
カマドの薪、風呂の薪を作り

女は脚立を移動して

二本目の若木取り組んでいます

森の中は今日も静かで  
夕餉の食卓はきつと

灯火の中で神への祈りと  
無事の喜びを祈るのでしょ

森の中に一軒家があります  
赤いトタン屋根が見えます

『一日に一詩 (09/19)』

感情がふれて生じた心を  
詩として書きとめる事が出来たら  
私は人生満足なのです  
そんな一日一詩の満足を出来たら  
私はこの上ない幸せなのです  
そう この上ない幸せなのです

『思ひ (09/19)』

終業の音が響き渡る  
工場ならサイレンが鳴り  
オフィスなら木琴の調和が  
夕暮れ時の道には  
帰宅の人々の三々五々が  
夕日に長い影が道にできる  
空は雲まで真っ赤に焼けて  
オフィス通りは街燈が灯り  
コーヒー店の明かりが  
道行く人を照らしている

田畑や野原の一本道を歩きながら  
自転車に追い越され車に追い越され  
ふっと私は思う  
生きとはなんなのだろうか

高層ビルの<sup>き</sup>階から降りて  
今度は地下<sup>き</sup>階のホームに立ちながら  
私はふっと思ふ  
生きとはなんなのだろうか

私はふっと思う  
生きとはなんなのだろうか  
人間とは宇宙とはなんなのだろうか  
私は他の何者でもなくなぜ私なのか  
出会いはなぜ起こるのか  
唯一知っているのは  
何もわかっていない事を知る  
唯一わかっているのは  
死があるということだけ  
死に向かって歩いていくという事だけ

『恐れ (09/19)』

あの時の痛みと同じだ  
手首がピアノ線で  
ぐいぐいと千切られるような  
痛みが走る  
そこから先の手が凍りのように  
冷たく食器を洗いながら  
お湯にじーっとつけている

あの時そんなに気にしていなかった  
妻に言うほどの事でもなかった  
病症が現れてからあの時と知った

震えているのです  
再び始まったのだろうか  
この手首を千切られるような痛み  
氷のような手の冷たさ  
再び始まったのだろうか  
たった一人たった一人  
蓄えたものなど食いつぶすだろう

結果を生きってみるか  
どう言う自分になっっているか  
人間として見てみようか  
どういう生活者になろうか  
生きに戦う自分を見てみようか  
それが私の人生なら  
乞食になっても生きてみようか

End all 2001/09



『冬の音一 (10/27)』

真夜中に降る雪は  
どんな音ですか

貴方の心に忍び込む  
雪の響きはどんな旋律ですか

私の肩に積もる雪は  
冷たく重たく悲しいです

雪って楽しい響きがあるんですか  
雪って暖かい語らいがあるんですか

真夜中に降る雪は  
どんな音ですか

寝静まった町を通り過ぎる  
精霊の響きはどんな旋律ですか

私の夢への旅路は  
子供の頃の貧しさと悲しさです

雪って  
夢の入り口ではないのですか  
雪って  
想いを運んでくる霊ではないのですか

End all 2001/10





『秋 (11/15)』

北風の吹る日々に  
もみじの燃えるような紅葉の  
銀杏の黄金に輝く葉の  
真の意味を私はいま知った  
絵を描けるようになって  
秋の一面を私はいま始めて掴んだ  
誰に感謝したらよい  
誰に喜びを伝えたらよい  
この痛む身体を引きずって  
失意の中で孤独に耐えて  
いま私は秋の意味を知りえた  
この喜びを神に感謝し  
生きの悲しみをもっと描けたら  
文章にして絵にして音楽にして  
生きの喜びをもっと描けたら  
文章にして絵にして音楽にして  
暖かき温もりが  
冬の季節の中にあることを  
いま知ったからもう恐くはない

End all 2001/11



『Osama bin Laden 捧詩Ⅰ (12/08)』

Peoples of America は知って  
Peoples of America は知って  
いるのだろうか  
資本主義の象徴ビルの崩壊を  
殉死で決行する人のいる心を  
Peoples of America は知って  
いるのだろうか

誰もそれを指摘しない  
誰もそれを指摘しない  
富と栄華を求めて止まない  
仮面が欺瞞社会は  
一斉に  
人と人との心の絆を尊び  
誠実と約束を大事に生きる社会を  
抹殺しようと立ち上がる  
正義と言う御旗のもとで

Peoples of America は知って  
Peoples of America は知って  
いるのだろうか  
なぜ自分達が標的になり

なぜそれほど憎まれているのか  
Peoples of America は思った事が

あるのだろうか  
反省した事があるのだろうか

『Osama bin Laden 捧詩Ⅱ (12/08)』

アメリカの人は  
とうとう  
貴方の心の中へ  
アメリカと言う社会の  
温かさを伝える事はしなかった  
いないな  
世界の社会は  
罪無き六千人以上の理不尽な死を  
決行する 貴方の涙を  
知ろうとも 理解しようともしなかった  
安らかに眠ってください  
可能なら 貴方の墓に  
理不尽で死んでいった遺族の方が  
花輪を添える日が  
必ず来る事を私は知っているから  
安らかに 人の社会を信じて  
永久の眠りについてください

『Osama bin Laden 捧詩Ⅲ (12/08)』

もう資本主義社会の道徳に  
貴方の呪縛によって安全は無くなった  
たえず 不安が横切る社会になりました  
世界が 貴方の墓へ  
花輪を捧げる日がくるまで  
この資本社会は 絶えず  
不安社会の中で育むでしょう  
この資本社会は 未来を見出す為  
何時の日か 貴方の墓へ  
花輪を捧げざるを得なくなるでしょう  
安らかに眠りについてください  
憎しみを消してください  
人類社会を信じてください  
アッラーフよ彼らに・彼に永遠の  
安らぎを与えて下さい

End all 2001/12